

## 「由良之助、待ちかねたア」について

12月です。12月と言えば『忠臣蔵』です。  
そこで今回は、これに纏わる話題を申し上げます。

待ち構えていたとき、または、ちょっとの差で間に合わなかった場合に「遅かりし由良之助」という言葉があります（今では余り使われていないかも知れませんが）。この言葉は、歌舞伎の「仮名手本忠臣蔵（かなでほんちゅうしんぐら）」からきた言葉です。

主人公の国家老・大星由良之助（大石内蔵助）の到着を待ちかねて、塩谷判官（えんやはんがん）が切腹します。その直後に由良之助が駆けつけるのですが、判官は由良之助に向かって、息も絶え絶えに「やれ由良之助、待ちかねたわい」と無念の思いを伝えるのです。

この場面、ももとの台本には「遅かりし由良之助」という言葉はありません。しかし、この場面に観客は酔いしれ、いつの間にか観客によって「遅かりし由良之助」という言葉に変わっていったと広まってきたと言われています。

この舞台のなかでは、由良之助は「切腹に間に合わなかった」ことから、この言葉は「もうちょっとのところで、間に合わなかった」という意味に用いられます。また、「待ち構えていたところに、相手がやっと到着した」というときにもこの言葉が用いられるようになっています。

話は変わります。仮名手本忠臣蔵の台本の「やれ由良之助、待ちかねたわい」を『オチ』にした江戸落語があります。いささか長いのですが、五代目古今亭志ん生の速記本からこの演題を転記してみます。

### 淀五郎（よどごろう）

えー、名人苦心談『淀五郎』といえう人情落語でございまして...・.....・....

えー、市川団蔵（だんぞう）と役者（ひと）がおりました。団蔵というのは、代々名人がでておりますが、この団蔵は四代目の団蔵で、俗に“シブ団蔵”と言ったくらい、芸が渋くってそりゃアうまい。江戸三座の一つ、森田座の座頭（ざがしら）でありまして、実に日の出の勢いで、この人のいうこたア何でも通った。

歳末（くれ）のことで、『忠臣蔵』を出して、客を呼ぼうとして、準備もすっかり出来た時分になって、

**頭取**（とうどり） 「親方ア」  
**団蔵** 「何だ？」  
**頭取** 「えー、判官を演（や）る役者が、病気になってしまいまして、代りがないんであります。親方の向こうにまわる判官ですから、どうも困ってしまったんですがねえ」  
**団蔵** 「おれは師直（もろのう）に由良之助の二夕役を演るんだ。ちょいと、香盤（こうばん）を見せてくンねえ」

香盤というのは、えー、役者の名前がズーツと、上（かみ）から、えー下に至るまで書いてあるもので、その香盤を見ておりました団蔵、

**団蔵** 「おー、これに演らしたらどうだい？ こいつなら出来るだろうから、演らしてみろ」  
**頭取** 「へえッ～」

と見ると、紀伊国屋（きのくにや）という芝居茶屋の俵で、沢村淀五郎というのがいる。まだ若くって、相中（あいちゅう）といつて下の方にいる地位の者。天下の団蔵の向こうにまわって、判官を演るという格じゃアない。

**頭取** 「よろしいでございますか？」  
**団蔵** 「あア、演らしてみてくれ。えー、若い者（もん）だっておめえ、演りようによっちゃ出来やしねえかなア、いいよ、演らしてみろ」

鶴のひと声で、頭取はいやとはいえないので、この淀五郎に判官の役をさせることになって、当人にこの話をする。とにかく名題（なだい）にしなくっちゃこの役はさせられない。だから、

**頭取** 「おまえさんを名題にするから、一生懸命に判官を演りなさいよ。三河屋の親方のおかげだよ」

えー、団蔵の屋号を三河屋と申します。

われわれ落語家（はなしか）でいってみりゃ、きのうまで前座に毛の生えた奴が、いきなり真打になるってんだから、こりゃア当人よろこんで、印物（しるしもの）をこしらえて、お客ンところを回って、初日の近づくのを待っている。

着到（ちやくとう＝太鼓のこと）もろとも楽屋入りをしておりますと、大序（だいじょ）二段目、三段目……と無事に済んで参りまして、「四段目」の判官腹切りという場面になった。

そこは、出物止（でものど）めといって、そのときには人を動（いご）かさなかった。

「え、若い衆（しゅ）さん、ちょっとアレ持って来てくれないか」 てえと、「いまここは、出物止めでございます」 そういうくらいの、この見せ物であります。

その「四段目」の、えー、判官でございます。誰が演っても型アおんなしで、力弥が、三方（さんぼう）の上に九寸五分（くすんごぶ）をのせて出て参ります。そうして、こう下手（しもて）へ退（さ）がる。から二（義太夫の二の糸）が、ヒォーン、ヒォーンと入って、場内は水を打ったよう。

**判官** 「力弥、由良之助は……」  
**力弥** 「いまだ、参上つかまつりませぬ」

それから、上（かみ）をはね（右、左と袴（かみしも）の襟をはずして）、すっかり支度をして、三方の上の九寸五分を、半紙にくるっと巻いて右手（めて）に持ち、膝だめしもすんで、

**判官** 「力弥力弥、由良之助は……」  
**力弥** 「いまだ参上オ……つかまつりませぬウ」  
**判官** 「存生（ぞんしょう）に対面せで、無念だと申し伝えよ。いざ、ご両所、お見届けください」

こうなると、お客の方も、かかわり合いみたいになっちゃう。

**客** 「え、なんしてるんだい、由良之助てえなア。判官、腹ア切っちゃうじゃねえか、グズグズしてやがんなア。えー、どこをのそのそしてやがんでえ。どっかで、焼酎かなんか飲んでやがんじゃねえか」

ぶつっと、左の脇腹へ突っ込むのがきっかけで、団蔵の、由良之助の出になります。花道から由良之助が……七三のところまで、こうピタッと平伏する。

**由良之助** 「大星由良之助義金（よしかね） たいまい到着ウ、つかまつってござりまする」

石堂右馬之丞（いしどううまのじょう）が立ち上がって、

**石堂** 「おー、城代（じょうだい）家老大星由良之助とは、その方か、苦しくない、近う進め、

近う近う近うッ」

**由良之助**

「ははッ、ははッ、ははア……ッ。

(平伏しながら団蔵にかえて) 何だいありゃア、まずい判官だなア。こんなじゃないと思ったがねえ……。たいがいのことは、我慢しようと思うが、この判官はひどいや、こりゃア、こりゃマズ判官だ。こんなところへ、おれが行って、御前だの、殿様だなんて、バカバカしくていえるもんか。ここでたくさんだ。え、行かなくてもいいや。ここで演ってやれ。

(由良之助になって) 御前!

ひどい奴があるもんで、花道へ坐ったきり動かない。石堂が、

**石堂**

「近う、近うッ」

たって動きゃしない。

**判官**

「おー、由良之助かア……。

(淀五郎にかえて) いねえじゃねえか。あれッ、何だ、七三にいる……。あッ、そうだ。おれの判官が気に入らねえんだ。あー、大変なことになっちゃった……。

(判官で) 待ちかねたア……ッ」

**由良之助**

「殿には、ご存生の態(てい)を拝し、由良之助身にとり、いかがばかりか……」

**判官**

「委細のことは、聞いたであろう……」

**由良之助**

「承知つかまっております」

**判官**

「この九寸五分……そちらへの形見にイ……わが鬱憤(うつぶん)をッ……」

**由良之助**

「(ごく事務的に)承知つかまつりました」

呉服店の番頭さんが注文でも取りに来たようで、承知つかまつりましたというだけで、いっこうに側へ来ねえ。仕方がないから、腹ア切っちゃって、幕がしまる。

**淀五郎**

「どうも、お疲れさまでございました」

**団蔵**

「おう、どうしたい?」

**淀五郎**

「ヘッ、さだめしお演りにくいことで、ございましたでしょう」

**団蔵**

「あア、演りいいたア、いえないなア」

**淀五郎**

「ちょっと伺いたいんでございますけれど、こないだの稽古ンときは、由良之助が判官のそばへ参りましたが、こんちは七三のところ、由良之助がああやっておりますが、あらア、どういう型なんでございましょう?」

**団蔵**

「型じゃないよ。ありゃア判官の傍へ行くのが当たり前なんだよ。えッ、だげども、行かれねえから行かねえんだ。なア、こっちは行きたいげど、行かれねえんだよオ。なア、よおくものを考えなくちゃいけないぜ。え、由良之助はどこから来るんだよ。播州赤穂から、早駕籠で飛ばしてくるんだアな、えッ、そうだろう。玄関の敷台へ片足イかけて、“殿はッ?” と、きくと、“いま、お腹を召したところでございます” ということを書いて、忠義無類の武士(さむらい)だから、前後をわきまえず駈けつけてゆくのが、あの七三のところだ。なア、あそこへ入ってみてえと、石堂右馬之丞という検視の役人がいる。城代家老たるものが、かような風(ふう)をしているというのは、実に見苦しいし、また無礼なことであると思ったんで、思わず知らずあそこへ、手をつくんだ。なア、石堂右馬之丞というのは、情けのある武士だから、“由良之助とはその方か。許すぞ、苦しうない、近う近う近うッ” といわれるから嬉しいじゃねえか。” はア……” てんで、主人の傍へ行って遺言をきき、またいるンな別れも惜しみたい……と思って、ひょいと見ると、あんな腹の切り方アしてるんだ。行かれねえじゃねえか。えッ、おい、そうじゃねえか」

**淀五郎**

「へえッ……。すると、どんな具合に、腹を切ったら、よろしゅうございましょうか」

**団蔵** 「どんな具合もこうもないや。本当に、切るんだいッ」  
**淀五郎** 「え？ 本当に？ 本当に切りや死にますよ」  
**団蔵** 「二、三度、死ななきゃダメだよ、おめえなんぞ」  
**淀五郎** 「あッ」

返す言葉がなく、その晩帰ってから、いろいろ自分で工夫をして二日目。着到もろとも楽屋入りをして、大序から、二段目、三段目……四段目となってくるてえと、また七三で動かねえ。

こんだア聞きにいくこたア出来ないから、幕がしまつて、顔オ落とすてえと、裏木戸から表へ出た。

**淀五郎** 「あー、よしゃよかったんだ。名題にならなきゃ、こんな思いしなくてすんだんだ。え、毎日毎日、七三でもって、由良之助が動かなかった日にゃア、淀五郎の判官が気に入らねえから、動かねえンだてえなア、お客さまにまでわかつちゃう。弱っちゃったなア……。

どうして切ったらいいったら、三河屋のじじい、本当に切れツてやがらア。えー、辞（や）めちゃおかしら、辞めて旅回りになっちゃおかしら。でも、宮地（みやち）イ落ちるなアいやだなア……。

こんな恥をかくくれえなら、団蔵が切れツてンだから、あした本当に切ってみてやろうかなア。本当に切りゃア気に入るだろう。でも、本当に腹ア切つて、死んじまつた日にやつまらない…。

いや、由良之助が出て来やがったら、由良之助エ突っ殺して、おらも腹切っちゃおう。相手が三河屋だア、命を取つかえたって、惜しかアねえや。よしッ、死んじまおう」

と、こんな了簡を出してきた。人てえもなア、こんなことを思うときが、あるモンですな。

方々を暇乞（いとまご）いをして歩いて、いよいよ明日ア団蔵を殺して、自分も腹を切ろうと思う。

遅くなって、自分の家イ帰ろうとする。中村座のわきを通るてえと、ダダダダーン ダラーン ダラーン……という、打ち出しの太鼓の音（ね）に、ひょいと気がついたのは、そのころ中村座の座頭をしているのが、中村仲蔵という、屋号を舞鶴家（まいづるや）といったおかたですが、この人ア腹切りの名人で、三役、腹を切りわけたという名人であります。

**淀五郎** 「あー、舞鶴屋の親方に世話ンなってるから、暇乞いをしてゆこう」

勝手口のほうから、

**淀五郎** 「こんばんはア」  
**仲蔵の女房** 「はい、どたたア～あ、まア、紀国屋の親方？そこはいげませんよ、こっちからお入んなさい」

昨日まで、「あら、淀さんかい。淀五郎さんかい」といっていた人が、名題になると「紀国屋の親方」と呼ばれるようになる。

われわれの落語家（しょうばい）がそうでな、楽屋で、「ナニさん」とか「アニさん」と呼ばれていたのが、真打という看板をあげると、「師匠」と呼ばれるようになる。実にこの、師匠と呼ばれるてえものはうれしいモンで、演者（あたし）なんぞたまに、「師匠」と呼ばれることがある。

「おう、師匠オ」

「へえ」

「下駄アとってくれ」 なんてえなア、あんまりいい師匠じゃアねえ。

**仲蔵** 「なんだい、おう、淀さん来たんかい。こっちイ来な、こっちイ来な。遠慮せんで、こっちイお入りよ」

淀五郎  
仲蔵 「へえ、どうも、ごぶさたを……」

「やア、あー、おめでとう。こんだア、名題になったんだってなア。こたいだ印物をも  
らったが、すまねえな。え、相変わらず評判もいいそうで、蔭ながらよるこんでんだ。  
え、何しろ三河屋のナンだからなア……。あー、おれも忙しくて、いま帰って来た  
ばかりだ。まア、ゆっくり遊んでゆきな」

淀五郎  
仲蔵 「ヘッ……。えー、今晚はア、実ア、あしたは暇乞いに、上がったんでござんす……」

淀五郎  
仲蔵 「暇乞いに？ なんだい、どっか行くのかい？」

淀五郎  
仲蔵 「へえ……」

淀五郎  
仲蔵 「どこィ、行くんだ？」

淀五郎  
仲蔵 「旅ィ行こうと思ってます……」

「旅？ そりゃよした方がいいぜ。せつかくおめえ、名題になって、旅へなんぞ出ちや  
つたら、第一、お客さんに忘れられちゃうし、芸アはくさくなるし……。えッ、少し  
くらい辛抱だア、なア、我慢してなよ。えー、で、いつ行こうてんだ？」

淀五郎  
仲蔵 「あした、行こうと思ってるんです」

「あした行く？ そりゃアおかしいじゃないか。こんだア、判官というものがないんで、  
おまえさんが名題になって、判官をつとめて、今日が二日目……あしたア三日目じゃ  
ないか。三日目に、判官がいなくなっちゃって、どうすんだい、えーッ？」

淀五郎  
仲蔵 「あたしも、行きたかアないんですがね……」

「行きたくなかったら、行かねえ方がいいぜ。えー、一体、どうしたんだい？  
（奥へ）おい、あの、表の酒屋へ行って、酒そういつて、帰りに魚屋へ寄つて、な  
んかみつくるって来な。  
あー、淀さんと、一ぺえ飲むんだから……ちょっと用があるから、ここへ入（へえ）  
つて来ちゃアいけねえぜ。  
（改まって）で、おめえ、おれに何か、かくしてんな、えー、小（ちい）せえ時分か  
ら、面倒見てんだ。こういうわけなんで……と、話したらいいじゃねえか？」

淀五郎  
仲蔵 「へえ、ヘッ……。わたくしの判官が気に入らないんで、三河屋の親方の由良之助が、  
判官の傍へ来ないんですよ。初日も、今日の二日目も……まだ来ないんで、これじゃ  
ア、わたしは、のべつ恥をかいてなくっちゃならないんで…」

仲蔵 「うーん……。きいてみたらいいだろう。どういうふうに演ったら、気に入るんでしょ  
う……ってな」

淀五郎  
仲蔵 「それが、本当に、切れッてんです…」

淀五郎  
仲蔵 「ほう！ 本当に切るんだよ、そりゃア」

「本当に切るっても、本当に切るくらいなら、自分が死んじゃつちゃア合わないから、  
あした由良之助を 突っ殺して、あたしも腹切っちゃおうと、思うんです…」

仲蔵 「そんな芝居はねえやな。えッ、おまいねえ、おい淀さん、おめえはまだ若えや。えー、  
引き出し違いしてやしねえかい？ 三河屋が、こんだおまいを、名題して判官てえ役  
ウつけたんだ。えッ、おまいを……、ふん、そうだろ？  
相手ア三河屋だ。おまいの判官がうまかろうがまずかろうが、てめえはてめえで勝  
手に演ってやがれ、おれはおれの役ウ演りゃアいい、他人（ひと）のことなんぞどう  
でもいいと思やア、なんにも気にしねえで演っちまうんだ。それを、おまいさんを判  
官にした以上は、どうにかしてやろう、早くうまくなってくれと思うから、演りにく  
い思いをして、七三で演っているんだ。  
なア、三河屋てえなア、おまえさんにしてみりゃ、芸の神様みたいたいなえらァい  
人だ。その人を、仮りに殺すのなんのって、とんだおめえ、間違いだぜ、なア、よ  
く考えなくっちゃいけねえぜ。  
人間、テンから和尚になれるもんじやない。なんで、一生懸命ィ演らねえんだ、何  
事も我慢だ。えー、蝶々（ちょうちょ）はきれいだつて人はいうけれど、毛虫の時分  
には、人にきらわれている。蝶々になって、飛び出して、“あー、きれいだなア”っ  
てえまで、我慢出来ねえのか。え、我慢しなくっちゃいけねえぜ。

えエ、どういう腹の切り方アしてンだい？　そこで一つ、腹ア切ってみな。おれが見てやるから……。あア、三方か、ウン、その辺からでいい、演ってごらん。うん、うん……（と煙草をつめて、ジッとみつめる）……ふうん、なるほど……（と、煙草を喫いながら、相手のひざから腹の辺りに視線を落とす）……ううん……（と、頭をふり、吸いがらをポーンとはたき）……あア、いいよ、わかったよ」

淀五郎  
仲蔵  
淀五郎  
仲蔵  
淀五郎  
仲蔵

「どうぞごぜんしょう～」

「まずいなア」

「そうですか？」

「あー、それじゃア、おれが由良之助でも行かねえや。あー、まずい判官だねえ」

「ヘッ？　そうですか？」

「あー、まずいよ。まずいといってもな、芸のまずいのは我慢するよ。若い者（もん）に、そこはなかなかうまくいくわけアないからな、ウン。」

おまいさんの判官は、実にはいやなところがある。気障（きざ）でいけねえよ。というなア、おまいさんは名題になって、紀国屋とか何とか、お客にほめられようと思ってンだろう。え？　あー、そうだろう？　だから芸に欲が出ちゃって、大名になれない。淀五郎が腹ア切るようになっちゃうんだ。

舞台へ出たら、もう淀五郎も名題もない。おれは五万三千石の大名だと、こういう気持ちだ。第一、自分は切腹ンなり、家は断絶する、家来たちには迷惑をかける。相手の師直（もろのう）はてえと、かすり傷はしたが何のお咎めもない。ああ残念だ、ああくやしいと思って腹ア切ると、てめえが客にほめられようと思って切るのは、こりゃ大変な違いだよ。なア、芸人の欲なて捨てちゃって、立派な大名が腹ア切らなきゃいけないんだよ。

お客さんはよく知ってるから、よけりゃアほめてくれる。いくらほめられようと思ったって、演ることがまずけりゃ、客アほめちゃくンないよ、な、そうだろう？

あー、なア、おまいのを見てると、おまいさんのはね、手をこう下へついて、腹ア切ってるが、ありゃア大名の腹切りじゃねえ。それは、勘平の腹切りだ。勘平てなア、狩人（かりうど）まで身イ持ちくずすような男だから、おんなし侍たって行儀アわるい。のたうちまわって、頬っぺたに血イつけたりして、行儀わるく切る。片方は、えエ、五万三千石の大名だよ、なア。大名の腹切りは、膝へこう（左手を太もものまん中に置き、右手を左の脇腹へあてて）のせたまんまで、品位というものをくずしちゃアいけねえ。

それに、なア、“由良之助かア……” という声が、大きいじゃねえか。え、刃物が、腹へ入（へえ）ってンだよ。そこを考えなくちゃいけねえ。え、刃物で突かれたとき、切られたときは、寒気がするモンだ。“寒いッ”　と思やア、声にふるえが来る。寒い、寒い寒いッと思って、声を出してごらん、ウン、あー……。

そいからな、青黛（せえたい）を、こう（左手で左耳のうしろ側をさして）耳のうしろへでも、ちょいとつけておいて、由良之助の出ンなると、客がみんな、セツ三のほうを向いちゃうから、そこを客にわかんないように、唇へちょいと塗ってごらん。白塗り、唇の色がかわる。欲を離れて腹ア切りゃア、判官になれるかもしれん。演ってごらん」

淀五郎  
仲蔵  
淀五郎

「(感きわまって)へへッ、ありがとうございます……」

「いけなかったら、またおいで。え、短気を出しちゃいけないよ。まア、一ぱい飲んできな」

「へえッ、いえッ、そのッ……」

帰って、淀五郎が、その晩いろいろと工夫をして、あくる三日目、楽屋入りをする。舞鶴屋の親方に心配をかけたけれど、ことによるてえと、今日がこの舞台の踏み納めになるんじゃないかと、ひとり考えている。

大序、二段目、三段目、四段目……いよいよ出になります、  
七三へ、由良之助が手をつく。石堂になった役者も、毎日、「近う近う近うッ」たって、来ねえんだからしようがないけれども、役だからいわねえわけにはいかない。

**石堂** 「おう、聞き及ぶ城代家老大星由良之助とはその方が、苦しくない、近う進め、近う近う近うッ」

**由良之助** 「ははッ、ははッ、はア……ッ。  
(団蔵にかえって) おやッ、なんだい、今日の判官は？ 不思議なこともあるモンだなア……。どうしたんだろう、あの野郎ア……。昨日と違って、ひと晩で……こんなによくなりゃアがった……。誰にきいたのかな……あ、そうか、舞鶴屋だな。それにしても、実によく出来た。よし、こいじゃアひとつ、傍へ行ってやらざアなるめえ……」

腹帯をぐいッと締め直し、かがみ腰になって、ツツツツツツ……と判官のわきィ、

**由良之助** 「御前ッ！」

**判官** 「おー、由良之助か？……。  
(切腹の形のまま、淀五郎で) あれッ、今日はお出ないのかい？ 七三にもいねえじゃねえか……。いくらおれがまずいといたって、まるっきり出て来ねえてえたアひどいや。ちきしょう、楽屋イ行ったら……。しかし、確かいま、近くで声がしたな……」

と、ひょいとわきを見ると、三日日ではじめて来ていた由良之助。こいっアうれしい。

**判官** 「(切腹の形のままで) **おー、由良之助かア、うゥーン、待ちかねたア……ッ**」

---

速記録を文字にしたものを「目」だけで読むと読みにくいところもあります。しかし、声を出す感じで読むと、感じがつかめます。如何でしょうか。

五代目 古今亭志ん生

本名 美濃部孝蔵。1890年、東京神田の生まれ。初代円朝門下の朝太を振り出しに、五代目志ん生を襲ぐまで改名16回。若い頃は酒と貧乏と奇行で知られ、戦後は実力、人気とも落語会の第一人者であった。1973年没。83歳。今年(2003)は、没後30年と言うことになります。

この話は、別名を『四段目』とも『中村秀鶴(しゅうかく)』(仲蔵の俳名が秀鶴)とも言います。登場人物は少ないのですが、歌舞伎を知らないと表現が難しい大物です。円生、正蔵(後の彦六、林家こぶ平が来年?正蔵を襲名することになっています)も芸の年輪を経て十八番(おはこ)にしていたとのこと。

ところで、ダイソー(ご存知、百円ショップ)で売っているCDの中に「日本の芸能シリーズ 落語名人19 古今亭志ん生」というのがあります。

この中にこの「淀五郎」は入っています。いつ頃演じたものか分かりませんが、なかなか良いものです。是非、お求めいただいております。そうしていただければ、上の記事が更に生きてきます。

今回は長々と書いてしまいました。

以上